

P-129 肺癌化学療法に伴う遅延性嘔吐の予防：メトクロプラミド・メチルプレドニゾロン・プロメタジン併用療法の検討

国立療養所近畿中央病院内科

○小河原光正，古瀬清行，河原正明，児玉長久，安宅信二，武本優次，土山哲雄，川口知哉，沖塩協一，山本傑，守屋賢介

【目的】肺癌化学療法に伴う遅延性嘔吐の予防としてメトクロプラミド・メチルプレドニゾロン・プロメタジン併用の効果を検討した。

【対象・方法】化学療法の前治療のない，CDDP 80mg/m²以上をday1に投与する症例を対象として，対照群と予防投与群に無作為割付を行った。day1は両群とも，グラニセトロン40μg/kg・メチルプレドニゾロン500mgを静脈内投与した。対照群では，day2以降の制吐薬の予防投与は行わず，予防投与群ではday2-3にメトクロプラミド2mg/kgx2，メチルプレドニゾロン125mgを静脈内投与，プロメタジン50mgを経口(分3)投与した。

【成績】94年7月-96年7月の間に21例に対し実施された。男性15例，女性6例，年齢45-74歳(中央値62歳)であった。対照群に10例，予防投与群に11例が登録された。day2-3に全く嘔吐が認められなかったのは対照群20%，予防投与群73%，day2-7に全く嘔吐が認められなかったのは対照群0%，予防投与群64%であった。

【結論】肺癌化学療法後の遅延性嘔吐の予防としてメトクロプラミド・メチルプレドニゾロン・プロメタジン併用は有効と考えられた。

P-131 肺癌化学療法に伴う白血球推移の検討 —末梢血幹細胞採取に関連して—

大阪医科大学第一内科

○芥川 茂，福田泰樹，鈴木ユリ，後藤 功，
K.Y.Min，大澤仲昭

【目的】肺癌に使用された化学療法の中で、末梢血幹細胞採取(PBSCH)に適するレジメン(CDDP+VP16を基本に)retrospectiveに検討した。【対象・方法】'84より'96までに当科で治療した肺癌症例のうち、CDDP+VP16(PE)9例、CDDP+VP16+VDS(PEV)20例、CDDP+VP16+MMC(PEM)11例、CDDP+CPA+ADM(CAP)10例の計50例(G-CSF未使用、初回治療)を対象とし、治療開始後の白血球数最低値(N)、回復期の傾き(A)、また幹細胞動員の指標として、幼若球の出現比率(Σ)を各レジメンにおいて比較した。

【結果】PE ; N=0.46% A=12.2 Σ=4.09%
PEV ; N=0.36% A=8.10 Σ=18.99%
PEM ; N=0.32% A=4.44 Σ=10.26%
CAP ; N=0.28% A=2.92 Σ=16.93%

Nが低くなるレジメンほどその回復は遷延するが、Σは高くなる傾向にあった。【考察】PBSCHには抗癌剤の追加または増量することでNを深くし、G-CSFで回復を早めることが好ましく、今回の検討でADMの併用は、PBSCHをより効率的なものとするのが推測された。尚、現在CDDP+VP16+ADMで採取効率を検討中である。

P-130 癌化学療法時の血中G-CSF動態と好中球G-CSF受容体との関係

長崎大学第二内科

○寺師健二，岡 三喜男，福田 実，長島聖二，
檜崎史彦，中野令伊司，河野 茂

【目的】Granulocyte colony-stimulating factor (G-CSF)は、癌化学療法による好中球減少に用いられているが、その薬物動態については不明な点が多い。癌化学療法を施行した患者を対象に、血中G-CSF動態と好中球G-CSF受容体との関連について検討した。

【材料と方法】対象は十分な骨髓機能を有し、同意を得られた9症例(肺癌8例、卵巣癌1例)。化学療法開始後、好中球が1000/μl以下に減少した日と5000/μl以上に回復した日に、Lenograstim 5μg/Kgを静注投与し、その間は2μg/Kgを皮下投与した。G-CSF投与初日と最終日に血中G-CSF濃度と好中球G-CSF受容体の測定を行った。

【結果】G-CSF投与により好中球数は、636/μlから6476/μlと改善した。好中球減少時と回復時の血中G-CSF動態はAUC 0.370 ± 0.086 μg·h/ml, 0.175 ± 0.049 μg·h/ml, T1/2 3.29 ± 1.1 h, 1.43 ± 0.5 hで、好中球数回復時のAUCとT1/2は有意に小さかった。一方、好中球G-CSF受容体陽性率は、46.6 ± 16.6%から74.4 ± 11.2%と上昇していた。

【結論】好中球G-CSF受容体陽性率は、癌化学療法時に投与されたG-CSFの血中動態を左右する主要な因子の1つと考えられる。

P-132 非小細胞肺癌に対する5-FU/CDDP 時間差化学療法の検討

県立宮崎病院内科

○一瀬一郎，待鳥浩信，田村和夫

【目的】進行非小細胞肺癌に対し、CDDPの効果増強を目的として、5-FUを先行投与する時間差化学療法を行い、その有効性と安全性につき検討した。

【対象と方法】対象は組織学的に確認された計測可能病変を有する原発性非小細胞肺癌患者16例で、PS 3以下、年齢35~73歳、臨床病期ⅢもしくはⅣ期の症例である。男性10例，女性6例で，組織型は扁平上皮癌5例，腺癌9例，大細胞癌2例であった。投与方法は，CDDPの作用増強を目的として5-FU 600mg/m²を持続静注し(day1-5)，投与終了後，約24時間の時間差をおいてCDDP 80mg/m²(day 7)を約2.5時間で点滴静注した。これを1コースとして，3~4週毎に化学療法を行った。

【結果】16例中，2例がCR，4例がPRであり，奏効率38%であった。CRの認められた1例については，化学療法1コースで腫瘍は消失し，術後の組織学的検索でも腫瘍の残存は認められなかった。副作用としては軽度の嘔気・嘔吐が認められるのみで，粘膜障害，腎障害はほとんど認められなかった。

【結論】本治療は副作用も軽度でその有効性が期待されると考えられ，今後，症例をかさね予後の検討を行う必要があると思われる。